

■ 大英図書館収蔵 -- カージャール朝期からパフラヴィー朝期にかけての文書群

ペルシア(イラン)に関する英国の諜報と政策 1900~49 年頃 British Intelligence and Policy on Persia (Iran), c. 1900–1949

大国の狭間で揺れるペルシア(イラン)研究- 英国情報機関の極秘文書

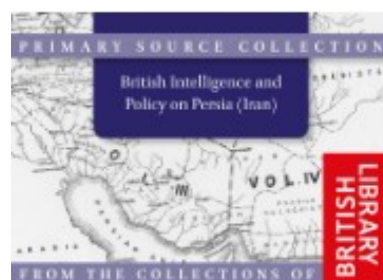
本コレクションの主題は、ペルシアが北のロシアと東の英領インドという二つの強国に挟まれた状況にあることです。19 世紀末までに、ペルシアは両国の利害のはざまに揺れ動く「遊び場」と化し、その状態はほぼ半世紀にわたって続きました。この間、南部で極めて価値の高い石油利権を獲得した英国が、最も影響力のある外国勢力として台頭しました。

英領インドおよびロンドンでの戦略計画や政策立案には、ペルシアの内政、部族構成、競争関係、主要人物、資源、交通、地形に関する情報が必要不可欠でした。これらの情報は、政治関係の背景を提供し、軍事作戦や秘密活動の実務的な知識を支えるものでした。

英領インドとロンドンの戦略的計画と政策立案には、国内政治、部族集団、対立関係、人物、資源、通信、地形に関する情報が必要でした。これらは政治関係の「背景」と軍事作戦や秘密活動のための実務的「ノウハウ」を提供するためです。情報収集は、まずペルシアの英国外交代表者に委ねられました。英国側には4つの主体がありました—ロンドンの外務省と陸軍省、英領インド政府外務部、そしてインド軍参謀本部です。ペルシアの駐在員は、ロンドンを拠点とする外交・領事サービスと英国陸軍、あるいはインド行政サービス、インド政治サービス、インド軍から採用されました。

本コレクションは、彼らの活動の成果を集約したものです。1905 年～1909 年のペルシア革命、1907 年の英露協定（ペルシアを事実上の勢力圏に分割）、第一次世界大戦における介入、共産主義の脅威、レザー・シャーの統治、第二次世界大戦における介入、ドイツの影響力への対抗策、ムハンマド・レザーの即位、といったテーマを扱っています。

英国のペルシア関与の歴史は、17 世紀初頭に東インド会社が貿易を開始した時点にまで遡ります。しかし、19 世紀末には、ペルシアの経済はロシアと英国の特許企業に大きく支配され、ロシアの保護国になる可能性すらありました。ところが、最終的には英国が支配的な外国勢力として台頭しました（ただし、必ずしも歓迎されていたわけではありません）。



大学・学術機関向け

買い切り(Outright Purchase)・同時アクセス無制限

※大学・学術機関向け IP 接続・同時アクセス無制限でのご利用となります。

※Archive 買い切りの年間管理費(Annual Hosting Fee)は不要です。

※正式な見積価格は最寄りの弊社まで別途ご用命ください。

トライアルも承ります!! 詳細お問い合わせは弊社まで

日本総代理店 **極東書店**

FAR EASTERN BOOKSELLERS
KYOKUTO SHOTEN LTD

〒101-8672 東京都千代田区神田三崎町 2-7-10 帝都三崎町ビル
〒600-8357 京都市下京区柿本町 579 五条堀川ビル
〒810-0073 福岡市中央区舞鶴 1-3-14 小榎ビル

03(3265)7531 FAX (3556)3761
075(353)2093 FAX (353)2096
092(751)6956 FAX (741)0821

URL: <https://www.kyokuto-bk.co.jp>E-mail: info@kyokuto-bk.co.jp

ロシアの企図と英国の戦略的利益の重要性を反映し、この国は例外的に広くカバーされていました。1850年代からテヘランに常設の英国公使館があったほか、1878年からブシールに、1891年からエスファハーンに、1889年からマシュハドに総領事が置かれ、さまざまな時期にアフワズ、ケルマーン、ケルマーンシャー、ホッラムシャフル、レシト、スィースターン、シーラーズに領事が駐在していました。

本コレクションの中心となる2つのシリーズは、インド政府外務部印刷通信と外務省年次政治報告書（1910～1948年）です。前者は44部、約5000ページにわたり、1916年から1940年間のペルシアに関するすべての受発信文書を印刷しています。ページ番号は基本的に不規則ですが、各「部」内では文書は連続番号で配列されています。また、外務省がインド政府のいずれかによって印刷された様々な駐在地からの領事日誌/要約の長い連載もあります（ただし1933/34年頃からはタイプ原稿が標準となりました）。日誌には各年の番号付き連番または年内の発行日があり、月次から週次まで様々です。

当時の通信は非常に煩雑となっており、主に外務省管轄の駐在地（例：テヘラン、ケルマーンシャー、ホッラムシャフル、レシト、シーラーズ）はロンドンの外務省に報告し、そこからインド省に写しが送られました。インド政府管轄の駐在地（例：アフワズ、ケルマーン、マシュハド、スィースターン）はデリーに報告し、そこからロンドンのインド省に写しが送られ、そこから外務省に転送されました。

1878年に、インド陸軍本部の宿営長官部内に小規模な情報部門が設立されました。1912～1913年のインド委員会陸軍の広範な改革により、参謀本部の軍事作戦局内に情報部（M.O.3）が設立され、4つの地理的小部門（そのうちの1つがペルシア担当）と「機密性の高い特別業務」に専念する5つ目の部門に分かれていました。

インド参謀本部は、地誌、道路案内書、軍事報告書、人名録の編纂を担当していました。情報源は外交拠点の武官や現地の軍将校（特に二つの世界大戦中）、彼らのペルシア人やその他の接触者、そして秘密裏に雇用された現地工作員でした。また、武官たちも定期的に情報要約を作成していました。マシュハド領事館は、ロシア中央アジアとアフガニスタンの国境を越えた動向を監視する特に重要な情報拠点でした。1913年に外務省は、軍事情報の収集は英国領事館の任務ではないと規定したため、この任務はほぼ完全にインド参謀本部に委ねられ、陸軍省からも資金面での支援がありました。

■文書のタイプ別に全5セクションに整理されたアーカイブ

1. Gazetteers and Handbooks, 1906-1948
2. Internal and External Affairs, 1904-1949
3. Who's Who, 1909-1947
4. Military Reports, 1900-1940
5. Routes, 1908-1942

各セクションの文書群は、以下の地理的範囲をカバーしています。

- ◇ 第1巻 北東部（ホラーサーン、カイン、スィースターン）
- ◇ 第2巻 北部・中央部（アゼルバイジャン、クルディスタン、ケルマーンシャー、テヘランを含む）
- ◇ 第3巻 南西部（ルリストーン、バフティヤール、エスファハーン、アラビスタン、フージスタン、カガル）
- ◇ 第4巻/1 南部（ヤズド、ファールス、ラリスタン、湾岸港）
- ◇ 第4巻/2 南東部（ケルマーン、ペルシア・バルチスタン）

すべての資料は「極秘」「機密」または「公務用限定」に分類され、厳格な保管規則の対象となっていました。また、特定の資料の新版が登場した際には、それ以前のすべての版を破棄することが命じられていました。その結果、これらの資料はごく少数の場所にしか残存していません。大英図書館のインド省記録に所蔵されているコレクションは、その幅広さとアクセスのしやすさにおいて他に類を見ません。

